

部落解放への想い新たに

11月に各地区で解放文化祭があり、地区進出学習会の成果やサークル活動の発表、教室等の作品展示、バザー等が行われました。天候にも恵まれ、全体で約1,200名の方に来場していただきました。

〔名和地区・11月7日〕

第25回名和地区解放文化祭は、人權交流センターで行われました。

オープニングには庄内保育所園児のフラッグ演技、庄内地区の方のバザーの協力等、地域をあげてのイベントになりました。地区進出学習会の成果発表では、子どもたちの解放に向けた決意表明もあり、多くの参観者がその姿を頼もしく感じました。

〔中山地区・11月14、15日〕

第23回中山ふれあい文化祭は、中山ふれあいセンターで行われました。

今年から名称を変えた文化祭では、部落解放同盟鹿兒島県連合会から宮内礼治さんをお招きして記念講演が行われました。同氏は5年前から

家業の太鼓屋を引き継いで、日々制作技術を磨いておられます。和太鼓づくりの実演や、

家業の太鼓屋を引き継いだ誇り、つくり手の想いについて語っていただきました。

〔天山地区・11月15日〕

第14回中高ふれあい祭りは、中高ふれあい文化センターと周辺施設で行われました。

中学生の意見発表のほか、岡田貢館長から「中高の部落史」の報告もありました。この内容はフィールドワークにも活用されており、参加者からは改めて地元の歴史を知ることができたと好評でした。



▲地域に伝わる盆踊りの様子

まちのたから(10) 文化財室通信

木造不動明王坐像の巻

今回は、大山寺霊宝閣に収められている木造不動明王坐像(町指定保護文化財)を紹介します。

神仏習合の寺院であった大山寺には、本坊西楽院と中門・南光・西明の各院十四の僧坊からなる合計四十三坊がありました。それぞれに本尊が祀られ、明治三年(1870)の記録『伯耆角磐山大山寺四十三院寺籍書上帳』から、

本尊は釈迦如来1体、阿弥陀如来18体、地藏菩薩9体、文殊菩薩1体、准胝観音1体、観音大士1体、不動明王12体であったことが知られています。

阿弥陀如来と地藏菩薩が多いことが大山寺で浄土信仰が主流であったことを物語っています。不動明王も多く、「修験の山」としての信仰の流れもうかがえます。これらの本尊のうち、今に伝わるものは、像高30〜80cmくらいの小型の

仏像で、阿弥陀如来及び両脇侍(国重要文化財)や木造不動明王坐像などの巨像が残されたことはとても貴重なことと言えます。

木造不動明王坐像は、像高135cm(台座を含む総高は286cm)の巨像で、胎内銘から鎌倉時代の弘安8年(1285)に泉国の仏師智月房禅慶によって制作されたことがわかっていきます。当時は二



木造不動明王坐像(大山寺霊宝閣収蔵)

度目の蒙古襲来の4年後で、まだ世の中が次の襲来に怯えている頃でした。この像は古くから国家安寧を祈る寺院であった大山寺に、異国調伏の祈禱を行い、人々の心の安寧をもたらすために奉納されたものと考えられています。大きく見開いた眼は、攻め寄る敵を押し除ける気迫に満ちています。

仏像が造られた背景を考えながら拝観すると、像に込められた当時の人々の思いが一層伝わってくる気がします。(人權・社会教育課文化財室)